The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

Ⅳ 書　評

菅原稔著『戦後作文・綴り方教育の研究』(溪水社刊)

大　内　善　一

1．本書の概要

本書は著者の菅原稔氏が平成14年度に広島大学に提出した学位請求論文を公刊したものである。

はじめに本書の概要を俯瞰して，著者・菅原稔氏の本書における研究の目的・意図及び方法に関して述べる。

本書は兵庫県下全域の小学校で行われてきた作文・綴り方教育の実践を博捜し収集してその成果を精細に分析考察した807頁に上る文字通りの大著である。本書の圧巻はなんと言っても考察の対象として菅原氏が発掘・収集された兵庫県下における膨大な数の文集と同人誌・機関誌，その他の様々な形の印刷物等である。その数は文集だけでも1700冊に上るとのことである。

菅原氏は本研究の目的に関して以下のように述べている。

> 戦後兵庫県下において展開された作文・綴り方教育を，可能な限りの第一次資料に基づいて詳細に分析し考察し，戦後作文・綴り方教育の地方的展開の姿を明らかにすることを目指したのである。具体的には，作文・綴り方教育の組織的な生成と展開，それを支えた実践および理論の成立と発展，そこで作られ用いられてきた文集の意義と成果をとらえることを通して，戦後作文・綴り方教育の全容を，兵庫県を事例としてとらえることを目的としている。(5頁)

菅原氏が意図したのは「戦後の兵庫県における作文・綴り方教育の展開の具体的な姿を記述する」ことを通して「わが国の作文・綴り方教育の実態をとらえ」(6頁)ていくことであった。

なお，菅原氏は自身の研究の立場に関して以下のように述べている。

> これまでの作文・綴り方教育史研究の立場は，国語科の枠の中の文章表現指導としての作文教育と，国語科の枠を越えた，生活指導ないしは生活問題解決のための綴り方(生活綴り方)教育を異質のものとして切り離すものであった。それが普通であり，また一般的であったと言える。しかし，「書く」活動そのものを中心として見る限り，両者は，書くこと(活動)と書かれたもの(文章)をともに重視するという，共通し補い合う関係にあるともとらえられる。今後の作文教育および綴り方教育のあり方を考究していくためには，このような共通性に積極的に目を向けて一元的にとらえていくことが必要である。本書において，作文教育と綴り方教育を区別せず，両者を可能な限り統一し止揚する立場に立ち，一貫して「作文・綴り方」と併記したのは，このような理由による。(5～6頁)

ここに述べられている菅原氏の立場に関しては，これまで本学会の場で氏の研究発表を聞かせて頂いてきた筆者としてはよく理解できることである。

しかし，ここに述べられている考え方に関しては筆者の側にいささかの異論がある。「国語科の枠の中の文章表現指導」と「生活問題解決のための綴り方(生活綴り方)教育」との間には教育課程上の枠組みに関わる違いと教育内容上の違いが横たわっている。この違いは大きい。両者を単純に「書くこと(活動)」と「書かれたもの(文章)」との違いというように割り切って性急にこの両者の「一元化」を求めてはなるまいというのが筆者の立場である。この問題に関しては本稿の末尾でも言及したい。

また，菅原氏は作文・綴り方教育史に係る従来の先行研究11点を検討してそれらと自身の研究方法との違いを明らかにしている。菅原氏が採った研究方法を要点部分のみ摘記すると以下のようになる。

> 第一は，作文・綴り方教育の組織的な取り組みの様相とその展開の内実を，戦後兵庫県下で刊行されたいくつかの同人機関誌を資料として取り上げて分析・考察する，文献中心の方法である。
>
> 第二は，戦後兵庫県下において作文・綴り方に取り組み，卓抜した成果をあげ，全国的にも大きな影響を与えた教師たちの実践を，典型的実践事例として取り上げる，個体史的な方法である。
>
> 第三は，戦後兵庫県下で刊行された様々な形の

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

文集を取り上げ，それを，作文・綴り方教育の具体的な成果と到達点を示すものとしてとらえる，帰納的な方法である。(10～11頁)

菅原氏が採った研究方法は兵庫県下における戦後の作文・綴り方教育の実践を〈組織〉〈人〉〈活動〉の面から構造的に捉えることであった。

この研究方法はそのまま本書の以下のような構成にも示されている。

2．本書の構成

本書の〈目次〉に示された構成部分のうち，各章と各節部分のみを取り出すと以下のようになっている。

序　章　研究の目的と課題，および方法
　第1節　研究の目的と課題
　第2節　研究の方法
第1章　作文・綴り方教育における機関誌の刊行とその展開
　第1節　戦後同人誌の刊行とその後の展開
　第2節　兵庫県国語教育連盟機関誌「国語兵庫」の刊行とその後の展開
　第3節　兵庫作文の会機関誌
　第4節　神崎作文の会機関誌
第2章　作文・綴り方教育における典型的実践の成立と展開
　第1節　村の地域性に基づく作文・綴り方教育実践―東井義雄の場合―
　第2節　都市の地域性に基づく作文・綴り方教育実践―戸田唯巳の場合―
　第3節　学級集団作りにはたらく作文・綴り方教育実践―小西健二郎の場合―
　第4節　社会認識の形成にはたらく作文・綴り方教育実践―黒藪次男・黒藪豊子の場合―
第3章　作文・綴り方教育における文集活動の様相とその展開
　第1節　兵庫県下における戦後文集刊行の動向
　第2節　学校文集の分析と考察
　第3節　学級文集の分析と考察
　第4節　個人文集・職員文集の分析と考察
終　章　研究の総括と結論
　第1節　研究の総括
　第2節　研究の結論

3．戦後作文・綴り方教育の復興と発展への礎を築いた背景の究明

上に掲げた本書の構成からも分かるように，第1章では昭和20年代後半から始まった戦後の生活綴り方教育復興とその後の発展への礎となった作文・綴り方教育同人誌・機関誌の刊行とその後の展開が叙述されている。

こうした動向の一端については筆者も拙著『戦後作文教育史研究』(昭和59年6月，教育出版センター）の中で「綴り方同人誌運動」と題して触れている。この同人誌運動は生活綴り方教育復興に向けた中央での動向と相前後して全国各地で綴り方教育の実践と運動に取り組んでいた若い教師たちの中で始まっている。その代表的なものに無着成恭らを中心に進められた『つづり方通信』運動がある。こうした一連の作文・綴り方同人誌運動は全国各地の教師たちを広く結びつけて生活綴り方教育復興への礎となっていったと考えられる。

本書の第1章において菅原氏が取り上げて詳細な考察を加えているのもこうした状況なのである。菅原氏は兵庫県下におけるこの同人誌運動の生成・展開の様子を兵庫県国語教育連盟の同人機関誌『国語兵庫』，兵庫作文の会の同人機関誌『作文運動』，及び県下の延べ28団体の中の13団体で刊行されていた独自の同人誌のうち，神崎作文の会が刊行していた『むぎのめ』とを取り上げて，200頁余を費やして精細な分析考察を加えている。

菅原氏が収集し考察を加えたこれらの兵庫県下の同人誌運動は県下のほとんどの地域を覆うものであったことが菅原氏の克明な調査によって究明されている。菅原氏はまた，これらの同人誌運動が昭和20年代の半ば過ぎに刊行された国分一太郎著『新しい綴方教室』，無着成恭編『山びこ学校』の刊行を直接の契機とする作文・綴り方教育の復興と期を一にしていたものであると指摘している。

本書の第1章における考察に基づいて，菅原氏が上記のような中央での作文・綴り方教育復興の動向と期を一にして兵庫県という一地域において，中央の影響を受けつつも極めて広範にかつ組織的に同人誌運動が興っていたという事実を明らかにしている点に本研究の大きな意義を認めることができる。

菅原氏はまた，先に見た戦後の作文・綴り方教育復興の礎となった同人誌運動とは別に，昭和32年当

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

時の兵庫県下において新たな形での作文・綴り方教育が教育現場での一つの流行現象にもなっていた事実を取り上げている。それは小西健二郎著『学級革命』(昭和30年9月，牧書店)，戸田唯巳著『学級というなかま』(昭和31年12月，牧書店）という二つの教育実践が提起した「新たな教育方法としての作文・綴り方による生活指導，作文・綴り方による学級作りの実践」である。

これら二つの実践が提起した教育の方法を菅原氏は二点にわたって取り出している。第一は「個々の児童の書くことと，それを学級全員で読み合い話し合うこととを，必然的なつながりを持つもの，切り離すことのできないものととらえ，集団によって個々の児童の生活行動とその背後にある思考や認識のあり様や方法を考えさせようとするもの」，第二に「個人の作業である書くことと学級集団の作業である読み合い話し合うことの反復によって，一人一人の児童の解放と確立を図るとともに，学級の中に仲間意識や集団意識を育てようとするもの」の二点である。

この「書くことと話し合うこととを切り離すことのできないもの，必然的なつながりを持つもの」とした実践記録を菅原氏はさらに大きく三つに分類して示している。①「書く⇄話し合う指導形態を教科指導の中に取り入れたもの」，②「書く⇄話し合う指導形態を生活指導の中に取り入れたもの」，③「書く⇄話し合う指導形態を同和教育の中に取り入れたもの」の三点である。

以上見てきたように，菅原氏は兵庫県下における同人誌運動の中に，「狭義の作文・綴り方教育だけでなく，より広く，教科指導，生活指導，学級づくり，同和教育と，その教育実践のすべてにかかわる極めて広い内容を持つもの」(240頁）という意義を認めている。

4．地域と中央とを連結する典型的実践・理論の発掘と意義づけ

本書の第2章では兵庫県下における作文・綴り方教育の典型的な実践を取り上げている。取り上げられた実践家は〈目次〉に記されている東井義雄，戸田唯巳，小西健二郎，黒藪次男，黒藪豊子の5名である。

東井義雄については戦前の実践記録『学童の臣民感覚』，学校文集『土生が丘』，実践報告『培其根』等の考察を中心に据えている。

東井は戦前から兵庫県綴り方教育人連盟に参加していた熱心な綴り方教育の実践家であった。戦後は戦時中の教育の責任を悔いて沈黙を守り求道者的とも言える実践を続けていた。そうした実践の記録をまとめたものに『村を育てる学力』がある。菅原氏はこの実践記録を全面には出さないで，東井実践を戦前の実践記録『学童の臣民感覚』から説き起こしている。敢えて東井の戦後における転向をその実践の中に焙り出していこうとする菅原氏の意図が窺える部分である。

菅原氏は東井実践を「表層としての知的認識・技能的認識を，それらを支える内的能力としての感性的認識・情意的認識から問題にし，作文・綴り方を中心とした『自分にひきよせ，自分のものとして考える』方法によって主体化しようとした」(300頁）と結論づけている。

戸田唯巳については学級文集『星の子のひろっぱ』と実践記録『学級というなかま』等の考察を中心に据えつつ，併せて戸田が勤務した瓦木小学校の教師集団による学級文集活動（40種326冊）の全貌にも考察の手を伸ばしている。

菅原氏は戸田の実践に関して「生活指導と表現指導とを一元的なもの，不可分のものととらえて展開」されていたものと捉え，こうした実践が「小学校における作文・綴り方指導のあるべき姿を示すもの」(364頁）と評価している。

小西健二郎については学級文集『たけのこの兄』と実践記録『学級革命』，学級文集『たんぱのこ』と実践記録『たんぱの子』等の考察を行っている。

菅原氏は小西実践に関して「作文・綴り方との出会い以前に，すでにその本質とも言えるものが基底にすえられていた」と捉え，「借りものではない独自の作文・綴り方教育が，また，典型的な形で形成され，実践されていったと考えられる」と判断している。その上で菅原氏は「『裸の子ども』『本当の子ども』を知るための『文をかいてもらって，よませてもらう。』『子供から学ぶ。』ことに徹したところから導き出されるものであり，教育・指導という概念を否定したところに成り立つ，優れた教育・指導である」(425頁）と意義づけている。

黒藪次男・黒藪豊子については学級文集『神部の子』と実践記録『ありがとう小さいなかま』，学校文集『せんちょう』と僻地における作文・綴り方教

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

育実践等について検討し考察を加えている。

菅原氏によれば黒藪次男の実践・理論は「自らの教室の中からだけでなく，『兵庫作文の会』や『日本作文の会』との積極的なかかわり・交流によって検証され，また深められていった」とのことである。

菅原氏は黒藪次男実践を「作文・綴り方を，一人の児童だけのものとはせず，常に，学級の他の児童とのかかわりの中に，言い換えれば，学級集団の中にある一人の児童の姿を表したものとしてとらえようとした」と見なしている。その上で菅原氏は黒藪次男の実践・理論の意義に関して「一人の優れた教師における深化・発展の姿を表すだけではなく，わが国における，戦後の作文・綴り方教育（実践）の歴史そのものを示すものともなったととらえることができよう」(517頁）と述べている。

続いて菅原氏は，黒藪豊子の実践・理論に関して「第一に，学級文集を，児童の文章の顕彰・称揚の場，書かせるためのワークシート，児童だけではなく保護者も含めた学級通信と，考え得る最も幅広い意義と機能を持つ，学級で創造し刊行する総合雑誌と位置づけている点」「第二に，優れた成果をあげているのは，とくに１年生の１学期の，作文・綴り方の入門指導である」と意義づけ，その実践とその背後にある考え方に対して「戦後のわが国の作文・綴り方教育（理論・実践）の一つの到達点を示すもの」との判断を下している。

５．菅原稔氏による本研究の意義と課題

紙幅の関係で「第３章　作文・綴り方教育における文集活動の様相とその展開」に関して言及することが叶わなくなった。菅原氏が第３章で導き出している兵庫県下で刊行されていた文集の独自の意義を以下に記して責めを塞がせて頂くことにする。菅原氏が取り出している独自の意義とは，第一に「文集を，補助教材としての，いわば書くために活用するという特質」，第二に「文集を，生活指導，生活問題解決のために，話し合いと切り離すことのできないものとして活用するという特質」，この二点である。

実は，この兵庫県下における文集活動の様相に関して菅原氏が取り出した意義自体に，菅原氏が取り組んできた本研究の意義も象徴的に現れていると言える。すなわち，上記した前者の意義は国語科文章表現指導にとって不可欠な特質であり，後者の意義は教科を超えて「書くこと」を広く教育の方法，生活指導の方法たらしめようとする実践上の特質を表している。

本研究を通して，菅原稔氏が一貫して明らかにしようとしてきた課題は，「書くことそのもの」を教育内容（教科内容）とする国語科文章表現指導と「書くことによる教育」すなわち書き綴ることを教育の一方法・手段と考えて国語科の枠外に広く生活全面の指導を行っていこうとする教育の行き方とを可能な限り統一止揚しようとすることであった。

兵庫県下における作文・綴り方教育の実践・理論は菅原氏の上記のような研究の課題にとってまことに格好の対象であった。

ただ，筆者が冒頭に述べておいたように，菅原氏における上記のような意図（課題）には教育課程上の枠組みの違いと教育内容上の違いという動かし難い壁が横たわっている。この壁を取り去るには「書くこと」の方法・手段上の機能だけの解明では不十分である。そのためには，「書かれたもの（文章)」を生活指導上の手掛かりとして児童の生活形成に導くという方法ではなく，「書く」という行為に含まれているより本質的な機能―「書くことそのもの」が児童の人間形成・生活形成に作用しているということ―を書くことの指導実践の中から解明していかなければならないというのが筆者の立場である。

兵庫県下の作文・綴り方教育運動及び実践とそのための理論究明への営みの中にも，「書くことそのもの」の指導を通した児童の生活形成・人間形成への志向という行き方が潜んでいると思われる。この部分の解明を今後の研究の課題として取り上げて行かれることを菅原氏にはお願いしたい。念のために断っておくが，筆者は勿論，兵庫県下で行われてきた作文・綴り方教育実践の中の「書くことによる」すなわち「書くこと」を教育の一方法として活用していく行き方を否定するつもりはいささかもない。

なお，本研究は地域教育史研究である。しかし，その内容は点としての実践を拾い集めた断片的な考察ではなく線として面としての連続性・立体性を充分に構築し得ている。この点にも本研究の大きな意義を認めることができる。

（茨城大学）

NII-Electronic Library Service